

## 姉妹のきずな

ほかみや  
りえ  
外宮 梨愛

「いたい。」  
物にまずき転ぶと同時に大きな声が出た。

「梨愛ちゃんだいじょうぶ。」

とんでかけつけたふたこの妹は、いまにも泣き出しそうだった。いつもの転んだいたみとはちがう、右足に広がる強いいたみから病院でしんざつしてもらった。右足小指のこっせつだった。なおるまでに三週間かかると言われた。これで二回目のこっせつだ。一回目にききうでをこっせつしたとき、思うように物をとったり字を書いたりできずに大変だったことを思い出し、動かせなくなった右足を見ていると悲しくてなみだが出た。

足をこっせつした生活は想ぞうよりもずつと大変で、自分でくつものはけないし、思うように動くこともできない。きのうまで自分でできていたことができなくなってしまった。学校での生活もこまることの連続だった。こっせつしたばかりのころは、ふたこの妹が荷物を持ち、後期課程の姉が教室までおぶつてくれた。その後は、いたみが引いて歩けるようになるまで、車いすをかりて生活することになった。先生や友だちがやさしく声をかけてくれたり、たくさん助けてくれたりした。前にききうでをこっせつした時よりも、一人ではむずかしいと思うことがたくさんある、大変な毎日だった。でも、そんな時、いつもいっしょにいて手伝ってくれたのが、ふたこの妹の愛望だった。

「だいじょうぶ、いたくない。」  
いつもやさしく声をかけてくれたり、いっしょに車いすをお

してくれたり、大変な時にはトイレの中でもわたしの手伝いをしてくれた。大好きな外遊びや体育ができなくて、気持ちが落ちこんでしまい泣いてしまった時も

「梨愛ちゃん、あと少しでおおるよ。」

そばにいてわたしの話を聞いて、やさしく声をかけてはげましてくれた。妹は、自分のやりたいことをがまんしてずっとわたしの手伝いをしたり、二人分の作業をしたりしてくれていた。大好きな外での遊びにもいかに。 「いつもありがとう。」 って思っていたけど何だかはずかしくて、この時は言えなかった。

妹の顔を見ると、いつもはげまされている気がして元気が出た。何も無い時は、こんな風に妹のことを考えたことはなかった。わたしたちは、ふたごで生まれてきた。妹とはいっしょで、なかよしだけじゃなくいっばいする。いつもいっしょが当たり前、横にいて、同じことを見て体を動かすことが当たり前、でもこんな当たり前前の生活がこんなにありがたいと思っただけはなかった。

二回こっせつをして、たくさんの人に助けてもらったけれど、やっぱり一番は妹だ。今こそはずかしがらず、自分のすなおな気持ちを、心を込めて伝えたい。

「愛望ちゃん、いつもありがとう。大好きだよ。これからも、ずっとよろしくね。」